

群読の教育的効果—響き合い—

読み合い、せめぎ合うことによる読みの高まり

群読のための作品は、古典だけに限られるものではありません。現代口語の文章であっても可能な作品はあります。ただ、『平家物語』のような語り物の枠をはずして、そのための教材を広く求めるとなると、教材発掘は容易ではないと言えます。どのような作品が群読に適するかは、吟味されなければなりません。

群読に適した作品で子どもたちが群読をするとき、子どもたち相互の影響によって好ましい高揚が起こることがあります。一人の子どもが優れた読みをすると、それに触発されて、次に読む者が声を張り、さらにそれが影響を与えて、グループ全体に緊張が高まり、皆の声が響き合い、共鳴し合うという現象が見られることがあります。子どもたち自身が群読の妙味に驚くほどです。

個による朗読では、読み手と読み手とは連続しません。だから、一人の読みが他に影響するとはいつても、少しの時間を経過した後ということになり、高揚した気分が断ち切られてしまいがちです。

ところが群読では、一人の読みを他が受けて、または、その上に重ねて読むため、影響は即時的で直接的です。群読に拙い子どもたちの読み合いではあっても、時として、まさに響き合うのです。子どもたちの「響き合い」は、プロの群読に比べれば、その起こる回数もはるかに少なく、レベルも低いものではありません。しかし、子どもたちの感動としてとらえられているという事実は、それ相応の価値が認められるということを物語っています。「響き合い」を求めるためには、自己を捨てて協力するのではなく、互いに「せめぎ合う」ことが必要となります。

響き合い成立の条件

(1) せめぎ合うこと

合唱に比べて、群読ははるかに素朴で原初的な音声化です。一斉にそろえて美しい声を出すことに腐心しないほうがよいのです。文章がもっているリズムに合わせて、一人一人が読み進めていけばよいのです。合わせようとしなくても、遂には合ってしまうものです。かえって、せめぎ合うつもりのほうがよいのだと思います。文章のリズムを強調し合ったほうがよいのです。合わせようとすると、声が萎縮してしまいます。響き合い成立のためには、常に気合いを入れて読むことです。

(2) 互いの位置と声を届ける(当てる)所とを確認すること

数人が教室の前に立って読むとき、特に子どもの場合は、あまり近寄って並ばせると透る声を出そうとしないことがあります。1メートル、できれば1・5メートル以上離して立たせるとよいでしょう。自立した凜とした声を発するようになります。

そうして群読をするわけですが、声を届ける(当てる)目標を決めさせるとよいでしょう。教室後ろの黒板のある一点とか、左から右に移動させつつとか、読む部分の内容に応じて、情景や聞き手を具体的にイメージさせるのです。目の前に舞台を描いて、そこに語りかけるのだと言ってもよいでしょう。